中 央 大 学
創立125周年記念式典

式 次 第

開　　式		
奏　　楽	戴冠式行進曲「王冠」 作　　曲　ウィリアム・ウォルトン 指　　揮　佐川　聖二 演　　奏　中央大学学友会文化連盟音楽研究会	
開　式　の　辞	中央大学創立125周年記念 式典行事実行委員会委員長 学校法人中央大学常任理事	大久保　信　行
式　　辞	学校法人中央大学理事長	久　野　修　慈
	中央大学総長・学長	永　井　和　之
祝　　辞	文部科学大臣	髙木義明様
	日本私立大学連盟会長	白井克彦様
	ミドルテンプル代表	ｴｲﾄﾞﾘｱﾝ・ｳｲｯﾄﾌｨｰﾙﾄﾞ 様
奏　　楽	行進曲「威風堂々」第1番 ニ長調 作品39－1 作　　曲　エドワード・エルガー 指　　揮　佐川　聖二 演　　奏　中央大学学友会文化連盟音楽研究会	
バーチャルリアリティ＆寸劇	「中央大学 源流、記憶 そして未来へ」 出　　演　柳家さん喬（中央大学附属高等学校卒業） 宮ヶ原千絵（中央大学総合政策学部卒業） 吉岡　拓麻（中央大学商学部3年生） 台本・演出　黒田絵美子（中央大学総合政策学部教授）	
誓いの言葉	中央大学学部生、大学院生、専門職大学院生、附属の高等学校・中学校生徒	
校歌斉唱		
閉　　式		

司　　会　曽根　純恵（中央大学経済学部卒業）
山口　真孝（中央大学文学部4年生）

2010年11月13日(土)　中央大学多摩校舎9号館(クレセントホール)

中央大学創立125周年記念式典　式　辞

学校法人中央大学理事長　久野 修慈

本日は、ご多忙のところ、髙木義明文部科学大臣代理鈴木寛文部科学副大臣並びにデイビッド・ウォレン駐日英国大使をはじめ各界の方々、また、ミドルテンプルからエイドリアン・ウイットフィールド様、海外協定校の代表の皆様並びに創立者のご子孫の皆様、そして、数多くの中央大学関係者の皆様をお招きして、この栄えある式典を開式できましたことは、この上ない喜びであるとともに、光栄の極みでございます。

創立より125年の間、数多の苦難・辛苦を乗り越え、現在の中央大学に輝かしい伝統と確固たる地位を築いてくださった創立者をはじめとする先人に対して、深甚なる敬意と衷心からの感謝を表するものでございます。また、この式典の挙行に導いてくださいました、創立125周年記念事業募金にご賛同賜った、27,000人にも及ぶ方々には、この場をお借りして、衷心より御礼を申し上げる次第でございます。

創立125周年記念プロジェクトは、今より10年前に準備に着手し、それ以来、あらゆる本学関係者によって支えられてきている事業であります。

このプロジェクトは、単に創立125周年を祝賀するという視点からではなく、競争概念が初めて大学間において認識されるようになった当時、その後の将来における本学の在り方に対して、本質的な競争力を持つため、戦略的観点からの事業として発議されたものでありました。

このプロジェクトは、平成11年5月17日開催の理事会において、「21世紀へ向けての本学の総合的な改革に関する理事会基本方針」が決定されたことにより、その端緒を開きました。この基本方針とは、理事会として、競争的環境の中にあっても、本学の伝統と発展を次の世代に継承させるために必要であると判断した項目をまとめたものであります。この基本方針に基づいて、平成13年3月開催の理事会及び評議員会におきまして、「125周年記念事業及び募金計画」として審議・可決されたことにより、中央大学創立125周年記念プロジェクトは開始されたのであります。

まさに、中央大学が新世紀を迎えるに際し、並々ならぬ決意と覚悟によって開始せられた事業なのであり、だからこそ、事業内容は多岐にわたっているのであります。それは、中央大学の伝統に真の活力と生命力を注ぐものであると申し上げられます。そして、このプロジェクト期間中、学員をはじめ多くの皆様方から、貴重なるご芳志を頂戴することを通じて、中央大学全体を更に発展させていこうとするものであります。その結果、現在まで、多摩キャンパスには、その玄関口「グリーンテラス」、「白門プロムナード」をはじめ、学生生活関連棟「Cスクエア」、学生研究棟「炎の塔」の建設、後楽園キャンパスには、新3号館の建設といったハード面とともに、ロースクール、アカウンティングスクール、ビジネススクールの創設をはじめ学部・大学院の教育体制の充実といったソフト面も一層充実いたしました。

そして、中央大学の過去・現在・未来を文化・歴史の象徴として融合させる「21世紀館（仮称）」の建設がいよいよ具体的検討に移り始め、さらに、生命科学のような新しい分野にも挑戦の歩みを踏み出しています。

それだけに、本日、開式された創立125周年記念式典では、中央大学の過去、現在をみつめることと併せて、更に、強く、未来に向かって、中央大学を積極果敢に変革･発展させようとする決意を表明する歴史的な場であると存じております。本日、この記念式典においでいただいた方々、国内外の本学卒業生の方々とともに、燃えるような決意を共有する記念の日といたしたいと存じます。

歴史を振り返りますと、増島六一郎初代校長を先頭に創立者18人も、同様に熱い決意をもって英吉利法律学校を創立したのであります。

国を思う若き創立者たちは、法制度の確立を通して、人々がみな平等な立場に立ち、一人ひとりが力を結集することこそが、新生日本を形作る上で、最も重要なことであると確信していたはずであります。

英吉利法律学校の創立は、社会の秩序を守る法知識を人々一人ひとりの中に根付かせんがために、慣習法を旨とするイギリス法をもって新たな枠組みを構築することを目標として、それに向かって創立者が心を砕いた結晶であります。英吉利法律学校の創立によって、創立者たちは、人々の中に、未来の日本の姿を大きく描いていたのであろうと思うのであります。国を構成する人々、一人ひとりの力を育て、信じ、人々による国の変革と確立を強く願望したのであります。それ故に、本学には、家族的情味や質実剛健といった学風が醸成され、「實地応用ノ素ヲ養フ」という自然体の建学の精神が育まれていったのであります。

125年前の日本と比べ、現在の日本は、グローバリーゼーションの時代を迎え、見通せる視界は無限に広がっています。国境によって世界を分割する時代から、分割されている国と国は強く繋がれなければ立ちゆかない時代になっているのです。今や、世界は限りなく拡大無辺に、真の平和と発展を希求しなければならない時代に突入しているのです。本日、開港151

年の歴史を有する横浜の地で、アジア太平洋経済協力会議「APEC」の首脳会議が開かれ、世界の平和と経済秩序の確立・発展につき、論議されます。まさにその日に、中央大学125周年記念式典が挙行されることは、将来の本学を展望するにとり、特に意義深いものであり、我々は、国際社会の教育向上を通じて、世界の平和と経済の発展を祈念したいものであります。

このような時代だけに、真理を探究する諸学問を実践する大学という高等教育機関は、そうした未来を様々な視点から探し、求め、もって、新たな時代の形成を果たす、それが真の役割なのではないかと深く考えるのであります。

本学は、創立後、四半世紀を超えた頃から、中央大学と改称の上、総合大学という新たな道を構築してまいりました。

その後、創立100周年を迎え、その第二世紀に臨み、こぞって意気を盛んにして新たな歩みを始めました。それから四半世紀。中央大学は、本日を期に強い決意の下、我が国の教育界と社会を担うため、本当の意味における第二世紀を迎えたと申し上げたいと存じます。その始まりである、今日ゆえにこそ、人々の中に未来をみる、人々とともに社会を構築するという、創立者の意を一層強く踏まえていかねばなりません。

それとともに、国内外のグローバル化の中にあって、この思いを至らせる人々は、もはや、我が国のみならず、世界各国の人々をも視野に入れ、地球的観点からの社会生成を目指す人材を輩出していくことが肝要となってきているのであります。

21世紀の国内外を外観すれば、人間の利害によって自然破壊や環境問題が生じ、また、異文化間の紛争が多発しています。それは、社会秩序の混沌にのみよるものではなく、時代に相応しくも普遍的な正義や倫理観の再構築が必要であることを意味しているのであります。

だからこそ、大学という高等教育機関は、その真の役割と在り方が強く問われてきているのです。

中央大学は、それに対して、確たる回答をもって、未来を形作る明確な目標を持たねばなりません。中央大学を構成するすべての人々が、率直かつ自然な姿勢の中にも、強い信念をもって、その目標を達成し、世界に存在感のある大学を構築しなければなりません。

未来を形作る明確な目標、それは、中央大学の創立者が、全く新たな観点から社会構築を目指したように、これからの中央大学にあっても、自らの力によって真の意味の正義を見いだし、どのような困難があっても具現化する人材を養成することであります。

そうした人材こそ、新しくも普遍的な社会的リーダーなのであると存じております。

中央大学の未来の姿は、世界中から、真のリーダーたらんと挑戦してくる学生がキャンパスに溢れ、国内外のあらゆる分野で中央大学の卒業生が真のリーダーシップを発揮していなければなりません。

また、中央大学の拠点たる、この多摩の地から世界に向けて、社会に貢献し、社会を豊かにするリーダーが輩出されなければなりません。

このような未来像を目指し、この多摩の地が世界の教育・研究機関の中心となり、併せて、中高大一貫教育をなお一層高めることにより、その裾野を広げることに力を注ぎたいと存じます。

そのことが、創立150周年、創立200周年に繋がっていると確信するのであります。

私は、この記念式典に臨み、中央大学が世界に向けて、なお一層、大きな羽ばたきをみせ、真の意味での国内外におけるリーダーが輩出される未来を思い描きながら、中央大学の存在を社会に強く示してまいりたいと思うのであります。まさに、そうした未来に向けて中央大学が走り始めた、その時が来たことを本学関係者に強く訴えるのであります。

この後、中央大学の過去、現在、未来を表現した美しい映像と寸劇をご覧になっていただくこととなっています。寸劇は、本学総合政策学部の黒田絵美子教授によって台本と演出がなされており、この上演を通じて、皆様方とともに、激動の時代に確たる未来を描くため、私たちが拠るべき思いを共有したいと存じております。

最後に、創立125周年記念プロジェクトに着手された、阿部三郎元理事長が、この晴れの式典を待たずに、この9月に旅立たれましたことは断腸の思い筆舌に尽くし難いものであります。ここに、理事長ご在職中のご貢献に心から御礼申し上げますとともに、中央大学の次世代への活路を開くこのプロジェクトに着手された阿部元理事長のご英断に改めて感謝するものであります。

本日の祝賀に際し、学員で、俳人の霧海先生から、次のような句が寄せられました。

世紀超え　六一郎の　菊咲けり

創立者の孤高の意志を象徴するかのような菊に、未来を託する気持ちを表現していると申し上げられます。本日、式典にご参加賜りました皆様方も、そのようなお気持ちで祝っていただいているものと存じております。

ご来賓並びにご列席の皆様方、そして、全国で配信映像をご視聴の皆様方におかれましては、この式典を通じ、中央大学の過去、現在、そして、未来への思いをお酌みとりいただき、今後とも、なお一層のご支援並びにご鞭撻を賜りますよう、お願いを申し上げるとともに、厳しい経済環境の中、創立125周年記念事業募金に貴重なご芳志を賜りました学員、ご父母の方々に深く、深く御礼申し上げ、私からの式辞といたします。

皆様、本日は、ご臨席を賜りまして、誠にありがとうございました。

中央大学の将来像 ―創立125周年記念式典において

中央大学総長･学長　永井 和之

ここに中央大学創立125周年記念式典を国内外の賓客をお招きして開催できますことは、本学にとりまして最も光栄とするところであります。

ここにすべてのご来賓の皆様に、まず心からの御礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

本学の栄えある歴史につきましては、後ほどのＶＲを始め色々な折に触れられるところでありますので、私からは一言だけのべさせていただきます。それは私たちすべての中央大学関係者は、本学の歴史を大変誇りに思い、そして、本学の質実剛健・家族的情味という校風を築かれた、世に知られている先輩も知られていない先輩も、私たち後輩は、心から尊敬し、感謝しているということであります。

私たち現役世代は、そのように先人が築いてこられた本学を、より一層発展させることを、ここに誓うものであります。

さて、本学は実地応用の素を養うということを、建学の精神としております。これを私たちは『実学』と称しています。この実学とは、社会のおかしいことはおかしいと感じる感性をもち、そのような社会の課題に対して応える叡智を涵養するということと理解しております。この社会の課題に応える叡智を涵養するには､高度の学問と深い人間性が必要であると考えています。これを学問×人間性＝叡智と捉えています。いかに高度の学問を修めても、人間力ゼロならば、叡智としてはゼロであるということです。そこで本学としては、横軸に人間力、縦軸に学問力をおいて、教育を構築しようとしています。そして、１２５周年を迎えるにあたって、この建学の精神にもう一度立ち返って、本学の教育を再構築しようとしています。今、社会の課題に応えるというとき、社会の課題は何かと考えますと、この地球環境、人口増大に伴う食糧自給の問題、そして平和など、地球規模の課題があります。このようなグローバル時代における実学として、国際社会の課題に応える国際的な人材を養成しなければなりません。そのような国際水準で計かって、それ以上の高度の教育を考えなければなりません。国際水準以上の先端的な研究の遂行と、それに裏付けされた教育であります。これが本学の国際化ということであります。

このためには人間力にとって必要なことは、異文化理解であり、異文化の人とも人間関係を構築できるコミュニュケーション力ではないかと思います。

また、世界最先端の学問を学ぶ総合的な学問の府でなければなりません。このように先ほどの人間力の横軸・高度の学問力という縦軸にそのようなファクターを入れていくということであります。地球的な視野というより、宇宙的な視野が必要なのかもしれません。約140億年前のビッグバンによる宇宙の誕生から、46億年前の地球の誕生《水の存在・水の惑星》というような宇宙規模での思考であります。

また、少子高齢化という社会構造の変化は、我が国を含む東アジアで顕著です。このような社会的課題に応える新しい社会システムを東アジアで考え、さらに将来大きな市場に成長するアジア全体における経済システムを考え、そして、世界の大きな文化圏であるイスラム文化を理解し、そして、キリスト教文化圏・ＥＵに至る道筋、これは、国際時代の実学を深める道筋でもあると考えています。これはまさに創立者の学んだイギリスのミドルテンプルへ、建学の精神を求め、本学の教育の再構築を求め、西に進んでいくという意味で､『学術シルクロード』と称している構想です。

このように地球規模の課題を正面から取り上げていくという本学の構想からいえば、本学の教育体制をそれにふさわしい体制にする必要があります。既存学部や大学院の内部から研究・教育の国際化を図りつつ、既存組織の変化を促し、促進させる要素としての新学部、それとコラボレーションするように既存学部の教育を改革するとするものです。このようなことは、既に行われているＦＬＰにおける教育と同じ意義を有するものです。

新しい課題に応える人材養成においては、既存の学部という教育体系だけでは修得できない複合的な教育が要求されている面があります。そのような複合的な教育に対応するのが、複数の学部教育を連結させる教育であります。本学は、そのようなことを促進し、学部の垣根を低くしていくという方向性を一方ではとりたいと考えています。学部の枠を乗り越えて、複合的な教育プログラムを考えていく中では、現在の課題を考慮すると、本学には医学・薬学という分野がありません。高齢化社会における問題を考えたときには、必要な分野です。そこで本学は、本学にない分野を持つ内外の大学や多様なシンクタンクとの教育研究交流協定などを積極的に推進していきます。

横軸としての教養における国際化・異文化理解、この幅の広さと多様性は、学部横断的なカリキュラムと、大学の垣根を超えた大学間交流協定で、国際的にも国内的にも充実したカリキュラムの提供につながります。

縦軸としての高度の学問体系における国際化と世界最先端科学や融合的な学問体系の構築も、そこから始まります。

本学の将来像は、それぞれ、このように高度化・国際化した学問の拠点が、一つの宇宙的な空間をなしているキャンパスであります。

この理想像はまさにラファエロの『アテネの学堂』の示している姿であります。

本日はまさに本学の新しい出発の第一歩ともいうべき日であります。本日ご臨席をいただいている皆様、インターネット等でご参加いただいている皆様、皆様のご厚誼・ご支援・ご指導を切にお願い申し上げます。最後になりましたが、皆様のますますのご健勝をお祈り申し上げて、私の挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございました。